

京都大学言語学懇話会
2011-2012 年度 活動報告

例会報告

第 87 回例会

- 日時・場所 2011 年 12 月 10 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
- 研究発表 「リトアニア語における Monosyllabic Circumflexion と Leskien's Law」
山崎 瑤子 (京都大学)
- 「朝鮮文献学」
藤本 幸夫 (麗澤大学)

第 88 回例会

- 日時・場所 2012 年 4 月 14 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
- 研究発表 「古ギリシア語テッサリア方言の「アイオリス風屈折」について」
南本 徹 (京都大学)
- 「量的形容詞の役割分担の変化」
服部 匡 (同志社女子大学)

第 89 回例会

- 日時・場所 2012 年 7 月 21 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
- 研究発表 「視点・知識・推論：日本語理由表現の意味論的分析」
田村 早苗 (京都大学)
- 「ロシア語の語順とイントネーション：書き言葉から読み取る発話力点とその
談話的意味」
Olga Yokoyama (京都大学 / UCLA)

第 90 回例会

- 日時・場所 2012 年 12 月 8 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第七講義室
- 研究発表 「臨床から見た言語機能研究—基本機能と周辺機能—」
岡田 理恵子 (近畿大学医学部 脳神経外科)
- 「言語接触かドリフトか—河湟語の場合—」
角道 正佳 (大阪大学)

リトアニア語の Monosyllabic Circumflexion と Leskien's Law

山崎 瑤子 (京都大学大学院)

言語学懇話会 第 87 回例会 発表要旨

リトアニア語は、長母音、二重母音、混合二重母音（同音節的母音 + ソナント）の 2 モーラ音節核において、上昇調 (acute; \acute{V}) と下降調 (circumflex; \hat{V}) の 2 種類の音調を、アクセントのある音節において区別する。Saussure (“A propos de l’ accentuation lituanienne (intonations et accent proprement dit)” *Mémoires de la Société de Linguistique de Paris* 8, 425–446, 1894)、Kuryłowicz (*L’accentuation des langues indo-européennes*, Wrocław 1958) などの先行研究によって、リトアニア語の acute 音調が一般的に印欧祖語の長母音を含む音節 (* \acute{V} , * \acute{VR}) と喉音を含む音節 (* VH , VRH) に遡ることが知られている。一方、Leskien (“Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen” *Archiv für slavische Philologie* 5, 188–190, 1881) は、そのような acute 音調を持つ音節は、リトアニア語において語末の環境で、短縮されることを示した : e.g., f. sg. nom. * $ger\acute{a}$ > $ger\grave{a}$ ‘good’ ~ $ger\acute{o}$ -ji ‘the good...’ (形容詞限定形)。ところが、先行研究によって示されてきたこのような一般的な法則に単音節語は従わないことが知られている (Hanssen “Der griechische circumflex stammt aus der ursprache,” *eitschrift für vergleichende Sprachforschung* 27 (Neue Folge 7), pp.612–617, 1885 他)。例えば、 $du\acute{o}s$ ‘will give’ は、リトアニア語の先史段階では * $d\acute{o}s$ (< * deh_3 -) という acute 音調を伴う形式であった筈で、Leskien’s Law による短縮 ($\times d\acute{u}s$) が期待される。ところが実際の形式は $du\acute{o}s$ である。本発表では、このように単音節語で期待と異なる circumflex 音調が現れる現象 Monosyllabic Circumflexion (MC) がどのようにして起こるのかを、構造記述を共有する Leskien’s Law との関連から考察した。先行研究に、最適性理論の枠組みで MC を Minimal Word Syndrome の一種として、 $Word_{min} = [\mu \mu]$ という制約によって引き起こされるという分析がある (Blevins “A Tonal Analysis of Lithuanian Nominal Accent” *Language* 69 (2), pp.237–273, 1993)。しかしながら、この分析は、他の言語での Minimal Word Syndrome においてしばしば見られる、本来 1 モーラの単音節語が引き延ばされる現象がリトアニア語には皆無であることとの整合性を欠く。そこで、Becker et al. (“Universal Grammar Protects Initial Syllables” February 10, 2011, 発表資料) において提案されている、第一音節が保護されるという忠実性制約 (Faith- σ 1) によって、単音節語においては Leskien’s Law が阻まれたが、語源的に 1 モーラの単音節語ではそれが延長されることがなかったという説明が可能ではないかと提案した。

(やまざき ようこ)

朝鮮文献学

麗澤大学大学院教授 藤本幸夫

本日京都大学言語学懇話会に発表の機会を頂きましたことに対し、吉田和彦教授を始めとする関係諸氏に厚く御礼申します。私は昭和三十五年に大学に入り、その後韓国留学三年をも含み、同四十八年に博士課程を修了した。大学へは中国学を学ぼうと入ったが、言語学科に進んでからはアルタイ語学を専攻しようと考え、蒙古語や満州語などを学んでいた。四回生の時に大阪外国語大学客員教授金思燁先生の朝鮮語を聴講したが、十人余の受講生が年明けには一人になったりして、辞めるに辞められず、結局受講を数年続けた。当時は身近に朝鮮について知る術も無く、また話し相手も無かった。しかしそのうち古くは朝鮮が東アジアでは中国に並ぐ文字文化国であり、多くの漢文資料をもっていることが判ってきた。考古学科には朝鮮考古学の大家有光教一先生が、また大谷大学には朝鮮古代史の権威三品彰英先生がいらっしゃったので、今になって思えば門を敲けばいくらでも御教導いただけたと思うが、当時は知恵が働かなかった。蒙古語や満州語資料には、若干のその言語で記録された歴史資料のほかは、中国の翻訳書が多く、一生それを対象とするには甲斐が無いように思われた。その点朝鮮は漢字資料が多く、また中国とも密接な関係を有して来たので、素志である中国学との接点を持てるのではないかと考えた。韓国・朝鮮は遠い国であったが、昭和四十年に韓国との間に国交が生じ、その二年後に金先生の御推輓を得て韓国留学に発った。当時留学生は少なく、語学関係では名古屋大学文学部言語学科助手であられた梅田博之氏が、数ヶ月前にソウル大学に行っていられ、初めて辱知を得たが、その関係は今日に至っている。梅田氏は国語国文学科、筆者は言語学科に所属していた。当時語学では中世語音韻論や文法論が中心であった。筆者は漢字に関わる吏読などの調査をし、その関係で古籍に触れることも多かった。帰国後は研究を続けると共に、日本には朝鮮古書が多いと聞き及んでいたので、日本にある朝鮮語学書の発掘に努めようと考えた。しかし実際始めてみると殆ど全てが漢文資料であり、特に調査費もない大学院生が調査し得る関西圏では殆ど全てが漢文資料といっても過言ではなかった。その中には中国書の翻刻も多かった。元来中国に関心を持っていたので、語学書発掘と研究のほかに、全朝鮮本の調査に思い至った。朝鮮本の悉皆調査は朝鮮語学のみならず、朝鮮学全般、そして中国学・日本学にも大いに寄与しうるものであることが、調査研究を進めるほど、次第に明らかになってきた。何かのときに泉井久之助先生に朝鮮本の調査に努めたいと申し上げた所、何をしてもいいが、本国人に引けを取らぬことをしろとの事であった。爾来荏苒四十余年、数年前に京大出版会から『日本現存朝鮮本研究 集部』を出し、今後経・史・子部及び総索引・図録篇を続刊の予定である。同書は韓国の研究水準を凌駕していると自負しており、泉井先生のお言葉に負いていないことを大きな喜びとしている。他の指導教授西田龍雄・小川環樹・濱田敦の諸先生を始め、未だに帝国大学教授の余薫を残しておられる諸学者の講筵に連なり得たのは、つくづく身の幸いであったと感謝している。伝統を承け継ぐ後学諸類のご活躍を期待して已まない。

(ふじもと ゆきお)

古代ギリシア語テッサリア方言の「アイオリス風屈折」について

南本徹

古代ギリシア語のいくつかの方言には、「アイオリス風屈折 Aeolic inflection」と呼ばれる特殊な屈折様式がある。これは、他の方言では語幹末尾が「短母音 (e, a, o) + 接尾辞 -ye/o-」であると分析される動詞（伝統的な文法の用語では「約音動詞 contract verbs」と呼ばれる）が、問題の方言においては長母音 (ē, ā, ō) で終わる語幹として屈折するものである。

「アイオリス風屈折」の起源については、いくつかの研究者が究極的な起源を印欧祖語に求めている（*-ch₂- Hock 1971, *-ch₁- Watkins 1971）一方で、まったくギリシア語内部の革新であると主張する研究者もいる（Jasanoff 2002/2003）。ただし、少なくとも一部の動詞について「アイオリス風屈折」が二次的であることは、多くの研究者の一致した意見である。

発表者は、「アイオリス風屈折」を示す方言のひとつであるテッサリア方言について、在証される約音動詞の個々の語例を検証し、その語源の可能性を追求した。語例の大半は、（テッサリア方言の形では）語幹末尾に -ē- をもつ名詞由来動詞で、「～である」という意味を持つ。これらの動詞については、その「アイオリス風屈折」の -ē- が祖語の *-ch₁- を受け継いだものであるのか、それとも祖語の *-e-ye/o- を改変して作られた二次的なものであるのかを決定することができない。

一方、kalē- 「呼ぶ」、perrā- 「試す」、telē- 「やり遂げる」の3語については、おそらくギリシア祖語の段階では接尾辞 *-ye/o- を持つ動詞であった（したがって、これらの動詞について、テッサリア方言に現れるアイオリス風屈折は二次的である）と考えられる。

特に telē- 「やり遂げる」については、テッサリア方言と同じくアイオリス風屈折を示す方言であるレスボス方言において、この動詞のみが例外的にアイオリス風屈折の語形を示さないことが知られている（レスボス方言での語幹は telee/o- または teleie/o- である）。この不一致は、テッサリア方言におけるこの動詞のアイオリス風屈折が、テッサリア方言内部で生じた二次的なものであることを強く示唆する。

以上のように、テッサリア方言には、この方言でのアイオリス風屈折が二次的であることを示す語が、少数ながら存在する。これは、Hock などがすでに述べた、「一部の動詞についてはアイオリス風屈折は二次的である」という主張を、実際の語形をもって証明するものである。

Hock, Hans Henrich. 1971. *The so-called Aeolic inflection of Greek contract verbs*. New Haven, Connecticut: Yale University dissertation.

Jasanoff, Jay H. 2002/2003. "Stative" *-ē- revisited. *Die Sprache*. 43 (2). 127-170.

Watkins, Calvert. 1971. Hittite and Indo-European studies: The denominative statives in -ē-. *Transactions of the Philological Society*. 1971. 51-93.

(みなみもと・とおる)

量的形容詞類の役割分担の変化

服部匡

最近、大規模なコーパスに基づく日本語の研究が可能になった。とりわけ、内省による方法が困難な通時変化の研究は、コーパスの利用価値が高い分野である。

本発表では、電子的に公開されている 1947 年以降の 60 年間の国会会議録(約 35 億字)のデータを 20 年毎の 3 期に分け、何らかの意味で程度的と言い得る名詞 168 語について、「大きい・高い・強い・多い・濃い」などの各形容詞との共起傾向の通時的推移を分析し、名詞の意味的特徴により、いくつかの推移のパターンが見られることを指摘した。

共起用例数とは、ある名詞とある形容詞が結合した用例の数である。総共起用例数とは、ある名詞に対する、全形容詞の共起用例数の合計であり、共起率とは共起用例数を総共起用例数で割ったものである。共起率差分とは、Ⅲ期の共起率の値からⅠ期の共起率の値を引いたものである。共起頻度とは共起用例数をテキストの 100 万字当たりで見た値である。

共起率差分の絶対値が 5 ポイント以上の名詞の数を形容詞別に示すと次のようになる。

表 1 共起率変動幅の大きい名詞の数

	高い	大きい	多い	強い	深い	重い	濃い	大	濃厚
上昇	63	43	3	19	1	2	2	0	0
下降	6	16	84	27	8	7	0	4	3

「高い」「大きい」「強い」との共起率の上昇した名詞が特に多いことが分かる。共起率頻度の変動の観点からも同様なことが言える。

そこで、各形容詞について、それとの共起率の上昇した名詞・一貫して共起率の高い名詞を眺めると、意味的な共通点のある語群が認められる。これを大局的に見れば、元々は共起形容詞の顔ぶれに関して多種多様であった諸名詞が意味的な類似性を軸として、主に単一の形容詞と共起する方向にまとめられていく変化とみなしうる。

一方、多くの名詞に対して共起率が顕著に減少した形容詞は「多い」である(やはり共起率頻度の変動の観点からも同様なことが言える)。当該名詞群の意味特徴を検討すると、これは、大局的には、「多い」の一種の意味変化と考える余地がある。つまり、抽象的な量の大きさを表す用法を縮小する方向への変化である。詳しくは、下記の小論を見られたい。

服部匡(2011a) 「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係—通時的研究—」『言語研究』140号, pp.89-116.

服部匡(2011b) 「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移—国会会議録のデータから—」『同志社女子大学学術研究年報』62号, pp.113-141

服部匡(2012) 「名詞と尺度的形容詞類の共起頻度の推移—国会会議録のデータから—」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』12号, pp.1-11.

(はっとり ただす)

視点・知識・推論：日本語理由表現の意味論的分析

田村 早苗

本発表では、日本語のカラ・ノデ節を用いた (1) のような例について論じた。

- (1) a. (先生がどなった後で学生が黙ったという解釈で)

先生がどなるから／ので、学生は黙った。

- b. 健は昨日山ほど食べるからお腹が痛くなるんだ。

(1) で下線を付した動詞の基本形は、いずれも過去の特定の出来事に言及している。しかし、これらの動詞基本形の時間解釈は問題である。一般的に日本語の時制形式の解釈は、基準時を発話時とする絶対時制解釈と、基準時を主節の出来事時とする相対時制解釈のどちらかによって与えられると分析されるが、(1) の下線部については、発話時基準、主節出来事時基準のどちらでも説明できない。このような例は、先行研究において例外的な時制解釈を受けるものとみなされてきた。

発表者は、日本語の時制形式の意味論を一部修正し、さらに、様々な主体の知識に対応する特別な種類の命題の存在を考察することで、(1) のような例にも一般性の高い分析を与えられると論じた。本発表の主な主張は以下の3点である。

- (2) 知識に対応する命題と、認識視点

命題は、物理的事柄について述べる「視点なし命題」と、主体の認識について述べる「視点付き命題」に分けられる。視点付き命題を解釈するには、どの主体のどの時間における認識を問題にするかの情報が必要である。この情報は、認識主体と認識時の対である「認識視点」によって与えられる。

- (3) 意志的／非意志的因果関係と理由文の構造

因果関係には、主体の認識が因果連鎖に介在しない物理的因果関係と、認識が因果連鎖に介在する認識介在的因果関係がある。日本語のカラ・ノデ節の補部は、物理的因果関係を表す場合には視点なし命題の意味論的レベル、認識介在的因果関係を表す場合には視点付き命題のレベルに対応する。

- (4) 時制形式の意味論

日本語の時制形式を解釈する際の基準点は、(A) 発話時、(B) (視点なし命題に対応する従属節において) 主節の出来事時、(C) (視点付き命題に対応する節において) 当該の節に対する認識視点 のいずれかである。

(たむら さなえ)

ロシア語の語順とイントネーション：

書かれた文から読み取る発話文力点 (SS) とその談話的意味

Olga Tsuneko Yokoyama

京都大学・UCLA

イントネーションが文の意味を把握するのに不可欠である前提で、書かれた文の意味をイントネーションが担う分まで把握できるかをロシア語を題材に考えてみた。ロシア語の語順とイントネーションのうちの発話文力点 Sentential Stress (SS) との間に次の関係が有るとした。

(1) ロシア語の発話文に SS の有るものと無いものとが有る。
(2) SS は改まっていない、又は聴き手との間に心理的距離の無い時の発話に出現し、話者が聴き手が持ち合わせていないであろうと推定 (assess) する知識を最も端的に表す単位に置かれる。

(3) 聴き手との間に社会的心理的距離が有る発話には SS が生じず、話者は聴き手が持ち合わせていないであろうと推定する知識を表すのに語順に頼り、聴き手が持ち合わせていないであろうと推定する知識を最も端的に表す単位を文末に置く。

このような分布から SS の意味に談話的側面と認知的側面とが有ると言える。談話的側面は話者と聴き手との社会的・心理的距離であって、認知的側面は話者による聴き手との知識関係の推定である。音声を伴わない書かれた発話文を見て読者は以上の意味を読み取る事が可能で有る、と本発表で主張した。

話者による聴き手との知識関係の推定はあくまで推定であって、その正確度も一定しない。推定を誤れば相手が訂正 (adjustment) を求めることもあれば、それを鵜呑みにしてそれに合わせる (acceptance) こともある。談話はその様な推定と訂正・是認を繰り返しながら進む。話者が聴き手が持ち合わせていないであろうと推定する知識を最も端的に表す単位を置いた位置から SS の有無と位置を逆算する事が可能になる訳である。推定成功確率の比較的高い次の詩の冒頭から読み取れるイントネーションとその談話的意味を考えてみよう。

(a) Ja vas ljubil. 「私は貴方を愛していた。」

I-nom. you-acc. loved

(プーシキン作)

認知的側面から見て、(a) の一・二人称の対象が対話の前提になっているので、聴き手が持ち合わせていないであろうと話者が推定する知識を表すのは述語である。その文末の配置から見て、(a) には SS が無く、話者が聴き手との間に改まった関係を想定していると分かり、(a) を声を出して読むことも出来るし、SS の欠如による談話的意味 (話者が想定した聴き手との心理的距離) をも読み取る事が出来る。

(おるが つねこ よこやま)

臨床から見た言語機能研究
—基本機能と周辺機能—

岡田理恵子

近畿大学医学部 脳神経外科

本発表の目的は、ヒトがことばを話したり聞いて理解するといった言語活動を行う際の言語の基本機能が脳のどの領域で処理されているかを、より信頼性の高い方法で同定することである。その中でも本発表では特に文に関する処理について考察する。さらに、言語活動に関与するものの、言語に特化したものではない認知機能（周辺機能）を明らかにすることで、臨床で行われる言語の評価方法を確立することを目指す。

ヒトの言語機能(language function)を司る脳領域（言語野）は左半球一側に局在する（側性化）すると言われ、右利き者で 97%、非右利き者で 70%が左半球に言語野が局在している（左半球優位）とされる。ここで言う言語機能とは、生成文法理論で言うところの「I 言語」である。生成文法は、普遍文法が言語刺激を受け安定状態に至ったものを「I 言語」と呼び、それが母語話者が脳内に持つ言語能力であると仮定する。これに対して具体的な語彙によって具体的な意味をなす文の集合が「E 言語」である。この理論に基づくと、言語機能研究や失語症などの臨床における言語評価では主に E 言語を扱い、そこから I 言語を評価するということになる。しかし E 言語には必ず言語の周辺機能が関与するため、それを如何に抑制するかが信頼性の高い I 言語データを得るカギとなる。本発表では 1)文処理に関与する脳領域の同定、および 2) 臨床における言語優位半球同定方法において、周辺機能を抑制することで I 言語に特化した脳活動を捉えることを試みた。

文の処理に関わる脳機能画像の先行研究では、複雑な課題を使用しているためワーキングメモリーなどの言語以外の認知機能も反映してしまっている可能性がある。本発表では fMRI にて、文処理に最小限必要である処理が仮定される文完成課題を使用することで、ワーキングメモリーの関与を最小限に抑えた状態で文処理の脳領域を捉えることができた。さらに失語症患者の病巣と言語症状から考察した結果、左下前頭回が Merge の操作および助詞の解釈に、左下頭頂小葉が動詞の項構造の解釈に関与していると考えられた。

次に、侵襲的な方法(Wada Test)に代わる手法として期待される fMRI による言語優位半球同定について、どのような課題が最も I 言語評価に適しているか考察した。音韻的語想起が最も Wada Test との一致率が高く、呼称と文完成課題は I 言語ではない認知機能が特に右半球に大きく反映されることが明らかになった。なかでも呼称における右頭頂葉、呼称・文完成課題における右前頭葉の賦活が大きく、それぞれ絵の処理、意味処理に関わる認知機能が影響していることが示唆された。

(おかだりえこ)

言語接触かドリフトか
—河湟語の場合—

角道正佳

中華人民共和国甘肅省および青海省で話されている河湟語（東部裕固語、土族語互助方言(Mongghul)、土族語民和方言(Mangghuer)、保安語、康家語、東郷語）を対象に先行研究で論じられている言語接触の事例を批判的に検討し、ドリフトの可能性を探った。多くの研究は単独の言語を取り上げチベット語または漢語からの影響を論じているが、対象言語を広げると必ずしもそのとおりではない。また影響を与える言語の何が対象言語の変化の引き金になっているのか明確でないものがある。

Róna-Tas は土族語互助方言の語頭子音連続をアムドチベット語との接触で説明できると論じているが、すべての河湟語で第一音節の脱落が起こっているの、語頭子音連続とは直接結びつかない。Жалсанは東部裕固語における格表示の一部（与位格）がチベット語の影響であると論じているが、例えば「～に尋ねる」はすべての河湟語で与位格を要求するので、チベット語の影響だとは言えない。一ノ瀬は東郷語のゼロ副動詞（動詞語幹のみで用いられる）が漢語の影響であると論じているが、例えば「～できる」「～できない」はすべての河湟語でゼロ副動詞を取り得るし、複合動詞の前部要素にゼロ副動詞が現れるのはすべての河湟語に共通の特徴である。一ノ瀬、栗林、Field は東郷語の開音節化が漢語の影響であると論じているが、結果的に音節構造が漢語のものに一致しているにすぎない。開音節化には複数の通時的変化が存在するため、変化を起こしている引き金が何か明確でない。また開音節化は多かれ少なかれ河湟語の多くで起こっている。Slater は土族語民和方言で同じ主張をしているが、子音の off-glide を過度に記述したため見かけ上、開音節になっているにすぎない。

言語接触によって変化が促進された面は否定できないが、言語によって影響を受ける量には差がある。アムドチベット語の影響とされる $i > a$ は土族語互助方言の東溝、東山、天祝、紅崖子溝には顕著に表れる一方、哈拉直溝、那龍溝には現れない。この差は地位差ではない。影響を与える言語自体に通時的・共時的過程が認められるならば、対象言語における変化の過程で何が引き金になっているのか明確にできる。漢語からの影響とされる東郷語及び土族語民和方言における反り舌子音の発生では引き金があいまいである。一方、口蓋化子音の発生は漢語臨夏方言に起こった通時的変化と平行している。また土族語互助方言の軟口蓋鼻音の直前の母音音価の変化はアムドチベット語で起こっている変化と平行する。河湟語には語末の $n > ŋ > \text{ゼロ}$ というドリフトがある。西北官話に起こった n と $ŋ$ の中和が結果的には土族語民和方言、東郷語の語末鼻音の現れ方とかなり一致する。

(かくどう・まさよし)

「京都大学言語学研究」(32号)の原稿募集について

京都大学言語学研究(32号)の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 提出原稿

- 原稿種別は以下の通りとする。
 - － 研究論文、研究ノート、書評論文、書評
- 完全原稿を提出すること。
- 印刷原稿、電子記録媒体(FD,MO,CD-Rなど)、もしくは電子メールでの投稿を受け付ける。別途用紙もしくは電子ファイルに以下の項目を記載して提出すること。
 - － 題目
 - － 執筆者名 ふりがな
 - － 原稿種別(研究論文、研究ノート、書評論文、書評)
 - － ページ数(要旨は含めない)
 - － 所属機関
 - － 連絡先(郵便番号、住所、電話・FAX番号、e-mailアドレス)
 - － 原稿の分野を表すキーワード(3~5個)
 - － 要旨を英語以外の言語で提出する場合は英文タイトル
- 電子ファイルで提出する場合は、PDF形式で提出すること。
- 提出原稿に特殊なフォントが含まれている場合、当該フォントが埋め込まれているPDFで提出することが望ましい。
- PDF以外のファイル形式で提出する場合は編集委員会までご相談下さい。

2. 研究論文

- 原稿枚数 原則として、図表などを含めA4判用紙30枚以内とする。これを超える原稿についても投稿を受け付けるが、採用された場合でも、掲載が次号以降になることがある。
- 文字のサイズ 日本語論文は明朝体12ポイント(1行37字程度)・1ページ35行程度、欧文論文はTimes系12ポイント・1ページ35行程度(1.5スペース程度)とする。
- 原稿の余白設定等 各ページのマージンを上下左右:30、35、30、30mmとする。印刷原稿で提出する場合、ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。
- タイトルと氏名 1ページ目のはじめにタイトルと氏名(中央揃え)を入れること。タイトルは14ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には2行分の余白を設け、タイトルと氏名の間に1行分、氏名と本文はじまりとの間に2行分の余白を設ける。匿名査読制のため、本文中に執筆者の氏名は入れないこと。また、本人が特定できるような表現はできるだけ避けること。

- 注について 注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは 10 から 11 ポイントとすることが望ましい。
- 要旨 A4 判用紙 1 枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に 1 行分の余白を設けること。
- 採否 編集委員会で決定し、原稿受付より二ヶ月以内に採否を連絡する。
- 原稿締切日 原稿は随時受け付ける。ただし受領日によっては、次号以降への掲載となることもある。

3. 研究ノート

原稿枚数は A4 判用紙 20 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

4. 書評論文

他者の出版物に対する批判的な考察で、独自の提言を含む論文。原稿枚数は A4 判用紙 20 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

5. 書評

原稿枚数は A4 判用紙 15 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。
(ただし要旨は不要。)

6. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
 電話/ Fax: (075) 753-2827
 電子メール: KULR-edit@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

7. その他

- 原稿及び電子記録媒体は原則として返却いたしません。
- L^AT_EX で執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 執筆者には、掲載号 1 部と掲載論文の電子ファイルを進呈いたします。抜刷を希望する方には実費にて作成いたします。
- 第 32 号は、2013 年 12 月発行を予定しています。
- 京都大学言語学研究室は、掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する権利を有するものとします。
- 研究論文と研究ノートに関しては、同一執筆者による複数の投稿は認めません。